

(3) 捕獲方法の選択

ヒグマが出没した場合には、まず現地の状況を確認することが必要ですが、ヒグマによる人身事故防止のため、銃器を携帯して確認作業を行うことが一般的です。そのため、市町村等では地元狩猟者を従事者とする、銃器によるヒグマの有害鳥獣捕獲の許可を取得します。

このように、ヒグマの有害鳥獣捕獲では、銃器を所持しての現地確認等が最初の対応となります。しかし、銃器による対応では次のような問題があるため、現状では箱わなに頼るケースが増えてきています。

- ・銃器による対応は捕獲の機会が限られており、捕殺に至るまでに高い技術が必要であること
- ・見通しが悪い状況での銃器による対応は危険を伴うこと
- ・夜間の出没に対しては銃器での対応が出来ないこと
- ・ヒグマに対応できる狩猟者が減少して、巻き狩り（P.31 参照）の実施が困難であること

箱わなについては、銃器に比べると比較的安かつ容易に捕獲作業を行うことができますが、設置や見回りなどの労力がかかること、人の出入りがある場所での設置は危険であることなどの問題もあります。

さらに、次のような状況がある場合には、箱わなに加えてくくりわなの使用を検討する必要も出てきます。

- ・箱わなを設置しても、ヒグマが箱わなを覚えていて捕獲が難しい場合
- ・地形的な制約で箱わなを設置するのが困難な場合
- ・畑等で被害があり、出沒経路が定まっており、かつ一般の人（山菜採り、魚釣りなど）が入らない場合。

このように、それぞれの捕獲方法には長所と短所がありますので、それらを十分考慮した上で、現場に最も適した捕獲方法を選択することが重要です。

2 銃器による捕獲

(1) 捕獲にあたっての心構え

この章では捕獲熟練者からの聞き取り調査をもとに、ヒグマを銃器で捕獲するための技術を紹介しています。ヒグマは他の動物と違い、その対応を一步間違えると生命の危険に関わることもあり、特に、銃器での捕獲はその危険性が高くなります。そのため、技術だけではなく、捕獲に携わる心構えも大切になってきます。ここでは、捕獲熟練者がヒグマを捕獲するときに大切にしている心構えを載せておきます。長年の経験の中で得られた技術や実績の裏には、こうした思いがあることを念頭に置いたうえで、その後の内容を読み進めてください。

【捕獲熟練者の意見】

- ・安全第一。決して無理をせず、条件が良いときを待つこと。
- ・捕獲に携わっているときは気をゆるめず、全神経を集中する。
- ・自分の自信がある条件のときに撃つ。ときには撃つのをやめる勇気も必要。
- ・クマの生態や習性を知ること。そのことで捕獲の機会が増え、危険も避けられる。
- ・恐怖心はよくない。冷静に対応できる度胸が必要。
- ・クマにも一頭一頭個性がある。決めつけてかからず、あらゆる状況に対応できるようにする。
- ・地形や自然の条件が違えば、クマの性質も違ってくる。
- ・クマの気持ちになる。

(2) 道具について

ア 銃器

ヒグマの捕獲では、ライフル銃を使用するのが一般的です。ただし、至近距離で遭遇する可能性がある場合やブッシュが濃くて跳弾しやすい場所では、散弾銃のほうが効果的なこともあります。最近では散弾銃でも、ハーフライフル銃身のように高い精度と威力を発揮し、ヒグマに対して十分に対応できるようになっているものもあります。

ライフル銃については、装填方式（ボルトアクション、自動など）や口径の違いによりさまざまな種類があります。銃の特性を理解した上で、使用する条件や自分に合ったものを選択することが大切です。

また、自分が使用する銃器については、射撃練習などを通して、取り扱いに十分習熟し、高い命中精度が発揮できるようにしておくことが最も重要です。

【捕獲熟練者の意見】

- ・ブッシュが多く見通しの効かない場所では、散弾銃を使用する。
- ・故障しにくく、装填時の音が小さい（ヒグマに気づかれにくい）のでボルトアクションを使用している。
- ・ボルトアクションの銃は慌てて操作すると弾が「かんでしまう」ことがあるので、落ち着いて操作する必要がある。
- ・自動銃でもきちんと整備していれば安全性は高い。
- ・ヒグマが近いときには装填が早いので自動銃がよい。
- ・口径が小さいライフルでもきちんと急所を狙えば、十分にヒグマを捕獲できる。
- ・軽くて持ち運びのよい銃がよい。
- ・ブッシュが濃いところでは銃身が短い方が扱いやすい。

イ 弾頭

現在、北海道では狩猟でヒグマを捕獲するときには、鉛弾の使用は禁止されています。ただし、有害鳥獣捕獲についてのみ、後述する指定猟法許可を申請することで鉛弾を使用することができます。

弾が命中したときの威力には、弾頭の貫通力とエキスパンション（命中した弾頭の広がりや散らばり具合）という2つの要素が関係してきます。貫通力が高く、エキスパンションが大きいほど獲物に与えるダメージは増しますが、これらの性能は弾頭の材質、形状、命中時の速度などによって異なってきます。

一般的に銅弾は、鉛弾に比べると材質が固いため、貫通力が高く、エキスパンションが小さくなります。貫通力が高いという点では、エゾシカなどに比べて骨や筋肉が丈夫なヒグマでは有利に働くこともあります。同じ銅弾でも、エキスパンションの性能を重視したものもあります。現在では銅弾もメーカーによっていろいろな種類があり（鳥獣捕獲技術テキスト p 31 参照）、それぞれに弾頭の特徴が異なります。それらを理解した上で、自分が使用する条件に適合したものを選択することが大切です。

さらに、大切なことは弾頭によって、銃身とライフリングなど内部構造との間に相性があるということです。弾頭と銃の相性が悪い場合には、弾着がまとまらないこともあります。射撃練習を通して、自分が使用する銃と弾頭の相性があうかどうかを確かめた上で、使用することが最も重要です。

ウ 指定猟法

有害鳥獣捕獲の許可を受ける場合で、安全上に不安がある場合に限り、鉛弾の使用を申請することができます。申請の様式は次頁の通りです。

別記第4号様式（第4条関係）

年 月 日

北海道知事 様

申請者

住 所	〒 電話番号
氏 名	印
職 業	
生年月日	年 月 日生

指 定 猟 法 許 可 申 請 書

鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律第15条第4項ただし書の規定により、指定猟法により鳥獣の捕獲等をする許可を受けたいので、次のとおり申請します。

指 定 猟 法 の 種 類	
指定猟法によらなければならない理由	
捕獲等をしようとする目的	
捕獲等をしようとする期間	年 月 日から 年 月 日まで
捕獲等をしようとする区域	
捕獲等をしようとする鳥獣の種類及び数量	
学術研究を目的として捕獲等をしようとする場合にあっては、研究の事項及び方法	
備 考	

注1 捕獲等をしようとする区域を明らかにした図面を添付すること。

2 氏名欄に署名した場合、押印を省略できます。

3 用紙の大きさは、日本工業規格A4とすること。

(3) 狩猟での捕獲技術

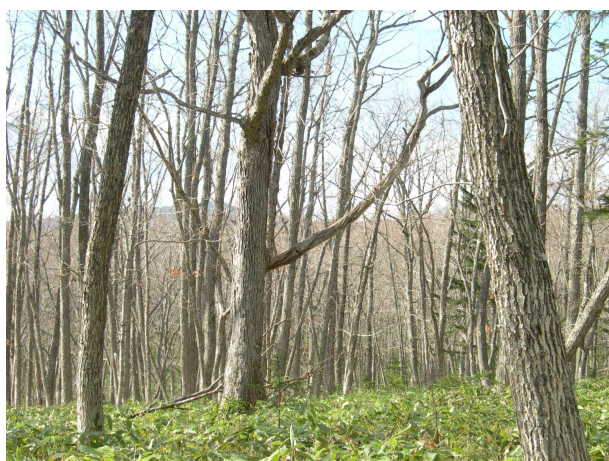
ア 居場所を判断する

狩猟でヒグマを捕獲するためには、猟場にする地域の山でヒグマがどのように暮らしているのかを知ることが大切です。例えば、秋にヒグマが好んで食べるサルナシ（コクワ）やヤマブドウなどのつる植物やミズナラなど堅果類が豊富にある場所は、ヒグマが餌を食べるために繰り返し訪れたり、あるいは休息のために周辺に滞在することがあります。このようにヒグマなど野生動物がよく利用する場所のことを「つき場」と呼びますが、こうしたつき場をたくさん覚えることがヒグマを捕獲するための第一歩になります。

次に、野生動物は移動のために頻繁に使用する道、いわゆる通り道（獣道）を持っています。通り道は周辺の地形、動物にとっての歩きやすさ、餌場との位置関係などから決まってくると考えられ、一頭のヒグマだけでなく、複数のヒグマが繰り返し利用するところもあります。

ヒグマはエゾシカなどに比べると生息数は格段に少なく、やみくもに山を歩いても遭遇の可能性はとても低いものです。そのため、遭遇の機会を増やすためには、こうした「つき場」や「通り道」をたくさん覚える必要があり、このことが「クマを獲るには山を知れ」と言われる所以でもあります。

■ミズナラ林

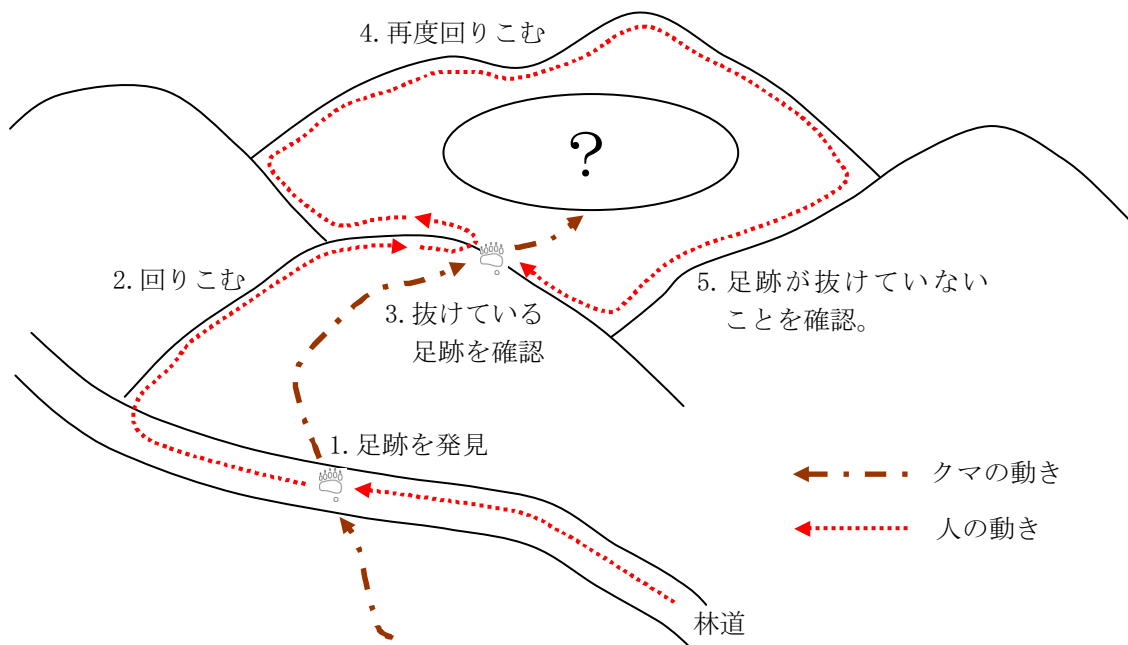


次に、ある程度猟場とする地域の山を覚えた後に、実際にヒグマの居場所をおさえることとなります。ヒグマの居場所をおさえることを「見切り」と言いますが、一般的には、雪がうっすらと積もり、足跡を追いやすくなったときが、ヒグマの見切りをするのに最も適した時期となります。

ヒグマを見切る典型的な方法は次の通りです。まず、できるだけ新しい足跡を見つけ、ヒグマがどの方向に向かっているのかを判断します。次に、ヒグマの足跡から離れ、ヒグマの向かっている方向に先回りかけをするようにして大きく回りこみます。このとき、回り込む距離が小さいとヒグマに気づかれてしまいますので、できるだけ大きく回るようにします。元の位置に戻るまでに、ヒグマが横切った跡がなければ、その歩いた周囲の中にヒグマがいることとなります。もしも途中で、ヒグマが横切った跡が見つかった場合には、さらにその場所を起点として、同じことを繰り返し、ヒグマがいる場所を絞りこみます。

山を覚えてくると足跡を見つけた段階で、ヒグマがどのつき場に向かっているのか、あるいはどの通り道を使うのかを予測することができ、より効率的にヒグマの居場所を見切れるようになります。しかし、そのような技術を身につけるまでには多くの経験が必要です。

■見切りのイメージ図



【捕獲熟練者の意見】

- ・山（つき場と通り道）を覚えること。
- ・餌場になる場所を覚えておいて、時期になると見てまわる。
- ・足跡の向かっている方向で、行き先を見切る。通り道を覚えておいて、先回りする。
- ・クマも歩きやすいところを歩く。
- ・山の7合目あたりで、日当たりがよく風が当たらないような場所で休んでいることが多い。
- ・クマも逃げやすい場所で休む。
- ・人に追われた経験があるクマは、山の上のほうにいる傾向が強い。
- ・ササの倒れ方でクマが通ったかどうかを見分ける。シカの場合は跳ねて歩くので、ササのかえり方が違う。

イ 忍び猟

単独及び少人数で行う猟です。見切りをしてヒグマの居場所をつかんだところで、ヒグマに気づかれないように近づきます。ヒグマは音や臭いに敏感な動物ですので、音を立てないように静かに歩くことが基本になります。また、このときに最も重要なのは風向きです。音や臭いで気づかれないように風向きをみて、風下からヒグマに近づくようにします。

まずは足跡をそのまま追跡します。この段階でヒグマに追いつくこともありますが、ある程度近づいてきたら、ヒグマの行動を読み、つき場や通り道を先回りするほうがヒグマに警戒されにくく、近づける可能性が高くなります。

ヒグマの居場所に近づいたならば、自分の気配を消す（音をたてないなど）と同時に、ヒグマが近くにいないかどうか、周囲の気配に十分警戒しながら歩きます。決して急がず、少し歩いては周りを見るということを繰り返します。倒木や木の根元、ブッシュの陰などでは、ヒグマが休んでいることがありますので、一つ一つ確認します。追跡をしているときに止め足（47 頁参照）を発見した場合は、一層の注意が必要です。また、子グマや小さなヒグマの場合は、木に登っていることもあるので、前だけでなく、木の上にも注意を払います。

次に、大切なのは常にヒグマより高い位置を保つようにすることです。具体的には、足跡を追跡する場合には、足跡を下に見るようにして歩き、先回りをする場合も尾根の上で待つように心がけます。高い位置にいるほうが、視野も広くなり、ヒグマの存在に早く気づきます。また、ヒグマに遭遇した場合や、発砲をする際の安全を確保することにもつながります。

【捕獲熟練者の意見】

- ・クマがいそうな餌場の見当がいたら、風向きに注意してクマより高い場所に移動する。
- ・足跡を確認しながら追跡する。追うよりも先回りするようにする。
- ・場所を把握したら、風をみる。常に風下から近づくようにする。
- ・足音を立てずに忍びで近づく。全神経を傾けて歩く。
- ・音を消すために靴を脱いで靴下で歩く。
- ・足跡よりも20-30m高い場所を歩く。
- ・近くなってきたと思ったら急ぎ足にならない。
- ・クマに近づいてくると独特のにおいがしてくる。
- ・風倒木や大木の近く、地形の低みに気をつける。隠れて寝ていたり、餌を食べていることがある。
- ・足跡を追跡するときは、前だけでなく周りにも気をつける。
- ・木の上にいることがあるので上にも気をつける。
- ・親子のときは上にも注意。子は驚いて木に登る。
- ・「走った跡があったら追うものではない。」
⇒気づかれたクマに追いつくのは難しい。
- ・風が強かったり、荒れているときは忍びで近づきやすい。
- ・雪の後に晴れて、樹上から融けた雪が落ちるような日も音がまぎれるのでよい。
- ・クマが眠たくなってくると、足跡がふらつく。
⇒寝そうな場所を探す。